

有明海水産資源回復技術確立事業*

タイラギ中間育成試験

山口 大輝

有明海沿岸4県では、タイラギ資源の回復を目的として、人工種苗の移植による母貝団地造成に取り組んでいる。

昨年度に引き続き、殻長約50mmまでの稚貝の中間育成については、12月頃まで福岡・長崎・佐賀の各県が熊本県へ預託することで稚貝の安定生産を図る取組を行っている。

当センターでは、今年度、着底稚貝が少量しか得られず、熊本県への預託はできなかったため、当センターで生産した稚貝に加え、福岡県から提供された余剰稚貝を用いて、県内海域で殻長約50mmまでの中間育成を行ったので、その結果を報告する。



図1. 筏中間育成の様子

方法

中間育成では、2023年9～12月の間、佐賀県太良町大浦地先の筏で、当センターおよび福岡県で生産された平均殻長9.2～12.4mmの稚貝を用いて実施した(図1)。飼育容器には、オレンジカゴ(アロン化成野菜収穫カゴ)を用い、飼育基質として玉ねぎネットにアンスラサイト(粒径2mm)を約10L入れてカゴ内に收容した。また、食害防止のため、カゴの上部をネトロン製のネットで覆った。飼育密度は、250～500個体/カゴとし、水面直下に設置した。飼育管理は、1週間に1～2回、飼育容器周辺の付着物を除去し、1ヵ月に一度、殻長と生残率の測定を行った。

結果

筏中間育成の結果を表1、福岡県生産稚貝の成長と生残の推移を図2に示す。生残率については11月末時点では、66.7%だったものの、12月に生残率が急激に低下し、12月19日の最終的な取り上げ時には、16.3%となった。成長については、開始時10.8mmであったものが、終了時となった。12月時点で生残率が低下した要因としては、飼育カゴ内に付着物が大量に付着していたことと浮泥が堆積していたことによる飼育環境の悪化が考えられた。

この筏中間育成で生残した1,500個体については、佐賀県海域の沖合および干潟に適宜、移植した。

*国庫補助事業名：有明海漁業振興技術開発事業

表 1. 筏中間育成の結果

回次	由来	中間育成期間	開始時の稚貝		終了時の稚貝		
			個体数(個)	サイズ(mm)	個体数(個)	サイズ(mm)	生残率(%)
1	福岡県生産	9/5~12/19	8,920	9.2	1,427	51.33	16.0
2	有明センター生産		297	12.4	73	54.21	24.6
平均	-	-	-	10.8	-	52.77	16.3
合計	-	-	9,217	-	1,500	-	-

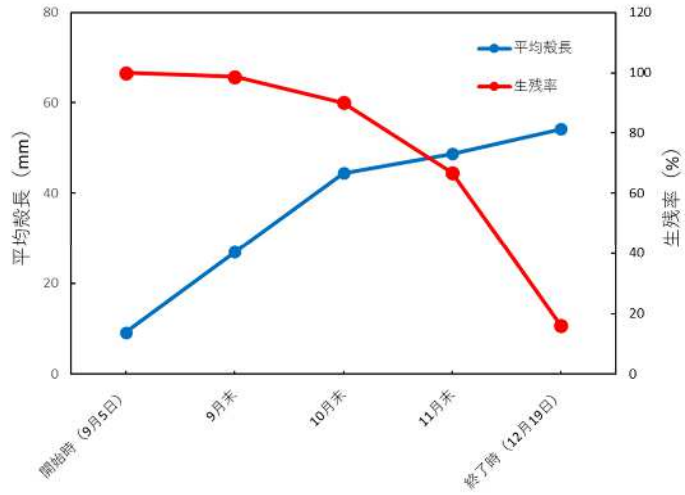


図 2. 福岡県生産群の成長と生残の推移